様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４３６０

研究課題名（和文）保育者のインクルーシブな環境意識を構築する巡回相談の実践的研究

研究課題名（英文）Practical Study on Itinerant Consultation to Build Inclusive Environmental Awareness among Nursery Teachers

研究代表者
三山　岳（Miyama, Gaku）

愛知県立大学・教育福祉学部・准教授

研究者番号：８０５８２８５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：保育者のインクルーシブな環境意識を構築する巡回相談においては、①相談対象児は保育者が同僚と確認しながら保育で確かに気になると認識した子どもであることを最大限尊重すること、②保育者はカンファレンスにおいて話し合った内容から、保育環境を改善・実現するための学びを確実に得ていること、③相談対象児の発達の状況やその背景に応じて、行動観察だけでなくその発言に注目することや、カンファレンスの進め方を工夫しながら保護者も交えることが可能なこと、さらにはインクルーシブな保育環境そのものに焦点を当てた相談を進めることも、保育者の意識や現状の改善には効果的であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の社会的意義の一つ目は、巡回相談が相談対象児の発達支援のみならず、保育者の保育環境を改善する保育支援の役割を持つことを確かめた点にある。心理の視点からは発達に問題がないと思われる子どもの相談でも、保育環境の課題を考える保育支援の観点から捉えることの重要性を明らかにした。二つ目は保育支援を含みこんだ相談では、子どもの状況や背景に応じて、新たな技法を導入することで、子ども理解や保護者との協働が深まり、インクルーシブな保育環境を実現することにつながることを明らかにした点にある。

研究成果の概要（英文）：In itinerant consultation aimed at building inclusive environmental awareness among nursery teachers, it is important to: ① Respect children identified as needing attention in the care environment as consultation targets, as recognized by nursery teachers after cross-checking with their colleagues. ② Nursery teachers have demonstrated that they effectively acquire knowledge from conference discussions to improve and realize an inclusive childcare environment. ③ Based on the developmental status and background of the consultation target children, nursery teachers should not only observe their behavior but also pay attention to their verbal expressions, and it should be possible to incorporate guardians into the conference discussions by adjusting the procedures. Furthermore, focusing consultations on the inclusive childcare environment itself has been shown to be effective in raising awareness and improving the current situation for nursery teachers.

研究分野：教育心理学

キーワード：巡回相談　インクルーシブ保育　インクルーシブな環境　保育支援　認知過程

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2001 年に WHO で採択された国際生活機能分類や、2014 年に日本が批准した障害者権利条約において、障害に対する支援は心身や身体の機能面に限らず、活動や参加の状態に影響を及ぼす環境面への支援も重視されるようになった。障害児保育でもどのような背景のある子どもも保育の活動に参加することを実現するインクルーシブ保育が目指されるようになり、その変化に応じた保育の支援が求められるようになった。

保育施設に対する障害児の巡回相談はこれまで障害児の発達支援のあり方を相談する場として機能してきた。発達障害の概念が広まった後も、従来の子どもの発達支援だけでなく、保育者の保育支援にも有効だと言われてきた。保育支援の側面については、巡回相談の副次的な支援ととらえられることが多かったが、2000 年代以降、保育者の相談対象に対する概念を変容させ、保育環境を改善する原動力となるとする研究が増え、実際の保育支援のあり方やその効果について検討する必要があった。

２．研究の目的

（１）障害児や気になる子に対する保育者の認知過程の解明

巡回相談のコンサルテーションで取り扱う対象となる、保育者の保育環境における保育概念が日常保育でどのような認知過程を経て生じたのかを解明する。具体的には保育者が保育の中で様々な情報を知覚し、解釈や意味づけを行い、巡回相談で語る状況として概念化するまでの過程を明らかにすることで、巡回相談で保育者が語る内容の理解が深まることを期待できる。

（２）保育者が保育活動でインクルーシブな環境を認識し、改善・実現しようとする認知過程の解明

実際の巡回相談において、インクルーシブな環境づくりに焦点を当てた相談をしたとき、保育活動や保育者の子どもに対する認知がどのように変容したかを明らかにする。具体的にはインクルーシブな環境の構築を目的とした指標を巡回相談での観察・カンファレンスに導入し、どのように保育者の意識や概念が変容したかを明らかにする。

（３）保育者の認知過程に効果的に介入できる相談技法と相談モデルの開発

上記の（１）と（２）を踏まえ、保育者がインクルーシブな環境を効果的に認知できる相談技法について検討し、その技法を導入した巡回相談のあり方を検討・開発する。具体的には、従来の巡回相談では保育観察・カンファレンスという流れにおいて、（２）のような指標だけでなく、子どもの理解とその理解に応じた保育環境を考えるための手法を考案し、それを実際に行うことでどのような効果があったかを検証する。

３．研究の方法

（１）保育者へのインタビュー調査

研究の目的（１）に照らして、保育者がどのように発達が気になる子どもを認識しているのかを明らかにするため、保育者に巡回相談の対象となる子どもが保育の中で気になる子どものとして認識する過程についてインタビュー調査を行い、そのデータを質的に分析した。

（２）保育環境に対する保育者の認識に対する質的・量的調査

保育で保育者がどのようにインクルーシブな環境を認識し、保育者同士の保育カンファレンスの中でどのように学びを得ているのかという認知過程を、日常の保育カンファレンスを観察し、その記録を質的に分析することで、保育者による保育環境の改善を実現するための学びがどのように行われているかを検証した。また、保育者を対象にインクルーシブな保育環境に対する質問紙調査を作成し、2000 人規模の悉皆に近い調査を行った。

（３）新たな技法の導入とインクルーシブな環境を測定する指標を用いた相談モデルの検討

巡回相談の相談技法に２つの手法（①対象児の言葉に着目し、詳細に記録してカンファレンスで検討する、②オープンダイアログの対話理論を背景としたリクレクション・プロセスを用いたカンファレンスを実施する）を導入し、その経過を分析するとともに、保育におけるインクルーシブな環境を測定する Soukakou（2016）の研究用 Inclusive Classroom Profile（ICP）を用いて保育場面を観察して評定し、巡回相談を経るごとにどのようにスコアの変化があるかを測定して、その効果を検証した。また、Soukakou（2016）の ICP そのものの結果をカンファレンスの話題として導入し、ICP の各領域について保育者とともに検討することで、インクルーシブな環境についての意識がどのように高まり、指標を測定した結果としてもどのように変化したかを測定して、その効果を検証した。

４．研究成果

目的ごとにその成果について報告する。

（１）障害児や気になる子に対する保育者の認知過程の解明

乳児期の子どもを保育する保育者を対象にインタビューを実施し、乳児期の子どもを担当する保育者が対外的に「気になる子」を認識するようになる心理的プロセスの可視化を目的とし、保育者にインタビュー調査を行った（三山 2019）。その内容を M-GTA で分析した結果、保育者の心理プロセスが保育者が気にする子どもの特徴や、保育者集団での問題の共有の問題、発達障害との関連から結果図（図１）において明らかにされた。この結果から、巡回相談の対象児は保育者にとって、保育者同士の検証を経て「気になる」と確信した子どもを相談対象として挙げていることが分かった。従って、巡回相談では保育観察からは子どもの気になる特徴が顕著でなかったとしても、問題ないと安易に結論づけられないと考えられ、現在の保育環境では確かに気になる子どもとして、保育支援が重要になる可能性があることを意味する。保育者が相談に挙げた経緯を丁寧に聞き取り、相談に応じていくことが重要であることが示された。

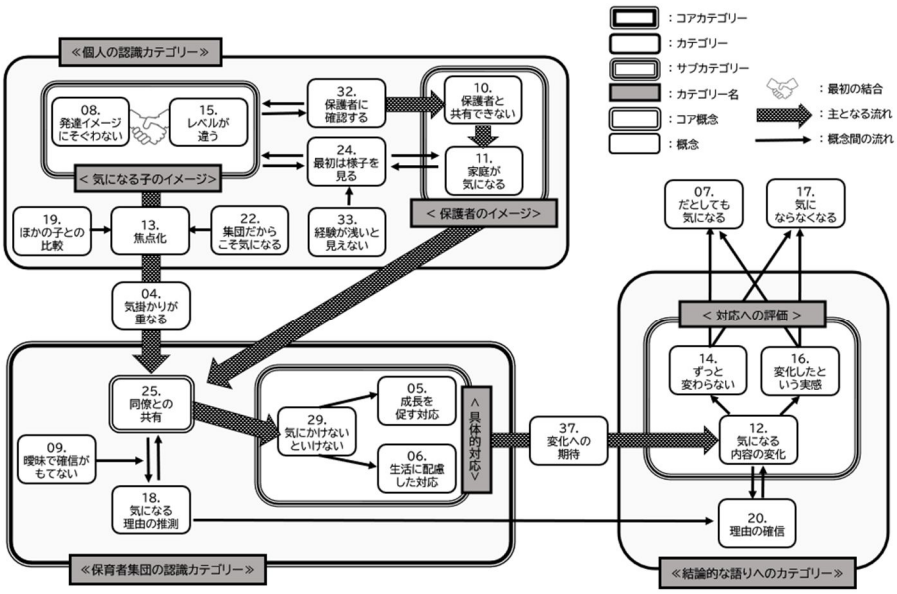

図1 保育者が気になる子として特定の子どもを語るまでの心理的プロセス

（２）保育者が保育活動でインクルーシブな環境を認識し、改善・実現しようとする認知過程の解明

まず、日常的に行われている保育カンファレンスに焦点を当て，その話し合いの内容を質的に分析した。その結果，専門性の向上は振り返りの促進と子どもに寄り添う視点にもとづいて，保育場面の語りを循環的に省察することによって生まれていることが分かった（三山・五十嵐 2020）。また専門性の向上におけるさまざまな学びが生じる条件を検討した結果，3 つの水準の 3 条件によって保育者の学びが分岐することが明らかとなった（図２）。

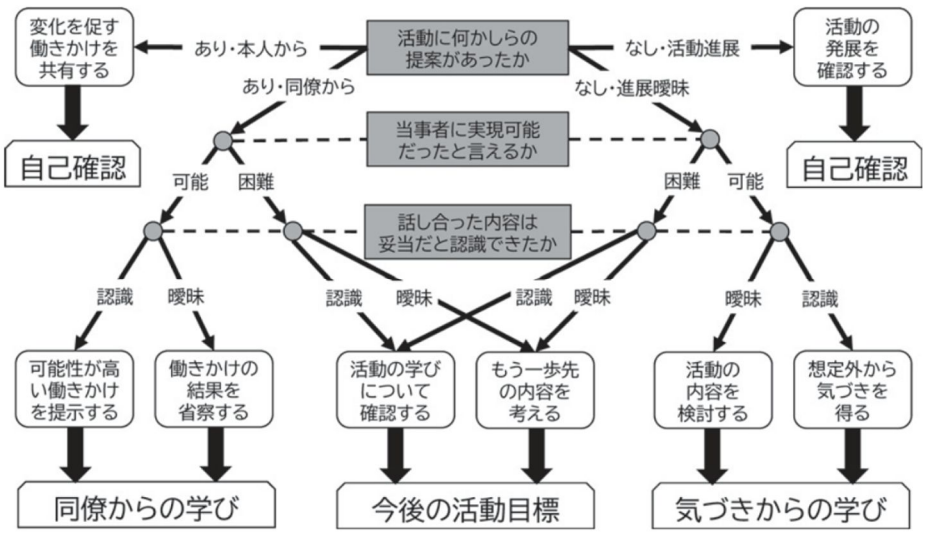

図２　専門性の向上に見られる学びの条件とその水準

また、インクルーシブな保育環境の構築についての意識態度を測定する尺度を作成し、保育者に質問紙調査を実施した（三山 2022）。その結果、保育の理念は保育現場に浸透してきているものの、支援が必要な子どもと集団との関係は理想と現実のずれが大きいことが分かった。また、このずれに対する保育者のネガティブな意識に対しては、研修で保育者の関心を高め、自主的・

積極的に保育者が研修を受ける支援の重要性が示唆された。

（３）新たな技法の導入とインクルーシブな環境を測定する指標を用いた相談モデルの検討

インクルーシブな保育環境の意識を保育者に持たせ、改善・実現することが期待される２つの技法を巡回相談に導入し、その効果を検討した。まず、ひとつめの技法として、相談対象児が保育中に示した発言に着目し、その発言にいたる状況やその発言による心情を保育カンファレンスにおいて丁寧に検討することで、知的に問題ない、あるいは軽度の発達障害児の相談においては、本人の困り感に即した子ども理解とその対応が可能になることを明らかにした（三山 2022）。次に、ふたつめの技法として、精神保健領域のカンファレンスにおいて注目されているダイアログ（オープンダイアログやアンティシペーションダイアログ）を巡回相談の保育カンファレンスに適用し、その効果を検証した。リフレクティング・プロセスを導入した相談では、カンファレンスで話されるトピックの種類が多く、保育者の発言に「保育の振り返り」が多くなる割合が高くなり、問題状況やそれにかかわる子どもの理解を多角的に捉えられる可能性が示された（五十嵐 2023）。また、発達の遅れが気になる外国につながりのある子どものケースでは、オープンダイアログ・アンティシペーションダイアログを導入して、保護者とともにカンファレンスを行った事例を検証した（五十嵐・三山 2024）。その結果、保育者と保護者の間で子どもの理解や問題状況の理解が深まるとともに、これからの保育を協働して考えあう関係性が生まれたと考えられた。

また、上記の研究においてインクルーシブな環境の変化を領域ごとに把握するために使用していた ICP をそのまま園内カンファレンスの研修ツールとして導入し、その効果を検証した（三山・五十嵐 2024）。カンファレンスを分析すると、最初は ICP の各項目の内容やスコアで足りない点の話題が多いものの、計 3 回のカンファレンス全体を通してみれば、どの項目も十分な時間を割いて話し合われ、ICP 各項目の意味や意義が確認されていった。その結果、各項目の内容がその後の日常の保育でも繰り返し意識されるようになり、スコアも上昇した。第 3 回のカンファレンスで各項目を複合的に参照しながらの話し合いになったのもその効果だと思われ、ICP を利用した園内研修の有効性が示唆された。ただし、ICP には欧米の幼児教育を前提としていたり、年齢による発達の影響を受けやすいため、実施にはその点を考慮・改良する必要性が感じられた。

以上の成果から、保育者のインクルーシブな環境意識を構築する巡回相談においては、①相談対象児は保育者が同僚と確認しながら保育で確かに気になると認識した子どもであることを最大限尊重すること、②保育者はカンファレンスにおいて話し合った内容から、保育環境を改善・実現するための学びを得ていること、③相談対象児の発達の状況やその背景に応じて、行動観察だけでなくその発言に注目することや、カンファレンスの進め方を工夫しながら保護者も交えることが可能なこと、さらにはインクルーシブな保育環境そのものに焦点を当てた相談を進めることも、保育者の意識や現状の改善には効果的であることを明らかにできた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 五十嵐元子,・三山岳	４．巻 7
２．論文標題 保育者-保護者-相談員の対話と協働に向けた保育カンファレンスの事例分析－外国にルーツのある子どもの保育相談から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早期発達支援研究	６．最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五十嵐元子	４．巻 24
２．論文標題 保育巡回相談における相談者と保育者の対話に向けて～リクレクティング・プロセスの効果の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 帝京短期大学紀要	６．最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三山 岳	４．巻 6
２．論文標題 インクルーシブな保育環境の構築に対する保育者の意識態度	５．発行年 2022年
３．雑誌名 早期発達支援研究	６．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 林 恵・五十嵐元子・若林秀樹	４．巻 23
２．論文標題 福井県越前市の外国人集住地域における保育－保育者の意識変容からインクルーシブ保育を考える	５．発行年 2022年
３．雑誌名 帝京短期大学紀要	６．最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 五十嵐元子	4．巻 23
2．論文標題 コロナ禍における保育の物語とインクルーシブ保育－保育者のインタビュー調査から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 帝京短期大学紀要	6．最初と最後の頁 183-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三山 岳	4．巻 309
2．論文標題 多様性のある障がいと多文化保育の歴史からインクルーシブ保育を考える	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊保育問題研究	6．最初と最後の頁 54-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 五十嵐元子	4．巻 309
2．論文標題 保育のなかの「多様性」と「多様性の尊重」を問い直す	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊保育問題研究	6．最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 五十嵐元子	4．巻 168
2．論文標題 子ども理解における保育と心理の共同構築‐オープンダイアローグからの学び	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊発達	6．最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三山 岳、五十嵐 元子	4．巻 58
2．論文標題 日常の保育カンファレンスにみられる学びの構造	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保育学研究	6．最初と最後の頁 131～142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.58.2-3_131	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 五十嵐元子・三山 岳	4．巻 21
2．論文標題 保育者の語りにみる子どもの関係と対話の分析（1）―支援が必要な子どもの周りにいる子どもに焦点を当てて―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 帝京短期大学紀要	6．最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三山岳	4．巻 3
2．論文標題 発達が気になる子について乳児期の保育者が認識する心理的プロセスの分析	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早期発達支援研究	6．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三山 岳・山本理絵・志村美和・瀬野由衣	4．巻 12
2．論文標題 幼児期からの就学移行相談・支援体制に関する研究--概要（研究所プロジェクト報告）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 生涯発達研究 = Journal of the Research Institute of Human Development and Welfare Aichi Prefectural University	6．最初と最後の頁 85～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004306	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三山 岳・岩倉けいら・川上貴美恵・佐々木由美子	4．巻 12
2．論文標題 子ども福祉における多文化共生の今 －療育・保育現場からの報告－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 生涯発達研究	6．最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004301	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三山岳・山本理絵・瀬野由衣・近野純子	4．巻 11
2．論文標題 幼児期からの就学移行相談・支援体制に関する研究：就学・発達相談担当者への質問紙調査結果のまとめ（中間報告）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 生涯発達学研究	6．最初と最後の頁 67-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00003951	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三山 岳	4．巻 288
2．論文標題 「子どもの多様性」に向き合うためのインクルーシブ保育	5．発行年 2017年
3．雑誌名 季刊保育問題研究	6．最初と最後の頁 64-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 三山 岳・五十嵐元子
2．発表標題 Inclusive Classroom Profileを用いた園内カンファレンスの試み
3．学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4．発表年 2024年

１．発表者名 五十嵐元子・三山 岳
２．発表標題 インクルーシブ保育を促進する園内研修ツールの開発に向けて
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 三山岳
２．発表標題 子どもの言葉に焦点化し、子どもの理解を深める巡回相談、インクルーシブ保育を支援する巡回相談とは
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会　ラウンドテーブル　話題提供者
４．発表年 2022年

１．発表者名 五十嵐元子
２．発表標題 リフレクティング・プロセスを取り入れた保育カンファレンス
３．学会等名 日本発達心理学会第33回大会　ラウンドテーブル　話題提供者
４．発表年 2022年

１．発表者名 芦澤清音、山本理絵、三山岳、浜谷直人、五十嵐元子、林恵、飯野雄大
２．発表標題 コロナ禍におけるインクルーシブ保育の可能性（１）ー保育の取り組みと変化への気づ
３．学会等名 日本保育学会第74回大会　ポスター発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 飯野雄大、芦澤清音、五十嵐元子、浜谷直人、林恵、三山岳、山本理絵
２．発表標題 コロナ禍におけるインクルーシブ保育の可能性（２）ー担任保育者の自由記述から見た現状と取り組みー
３．学会等名 日本保育学会第74回大会　ポスター発表
４．発表年 2021年

１．発表者名 三山 岳
２．発表標題 障害と多文化を包括するインクルーシブ保育の可能性（２）
３．学会等名 日本保育学会第73回大会　自主シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 三山 岳
２．発表標題 障害と多文化を包括するインクルーシブ保育の可能性
３．学会等名 日本保育学会第72回大会　自主シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 Rie Yamamoto, Gaku Miyama
２．発表標題 Developing ECEC professionals in local government in cooperation with universities : An analysis of special support education training
３．学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Gaku Miyama, Motoko Igarashi, Naoto Hamatani, Kiyone Ashizawa
２．発表標題 The role of teachers’ discussions in comprehending dialogical relationships among children : Analysis of an inclusive environment in a kindergarten (2)
３．学会等名 EECERA 28th Conference Budapest Hugary（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 芦澤清音、浜谷直人、五十嵐元子、林 恵、三山 岳、飯野雄大、山本理絵	４．発行年 2023年
２．出版社 ひとなる書房	５．総ページ数 208
３．書名 すべての子どもの権利を実現するインクルーシブ保育へ	

１．著者名 浜谷　直人、芦澤　清音、五十嵐　元子、三山　岳	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 248
３．書名 多様性がいきるインクルーシブ保育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	五十嵐　元子 (Igarashi Motoko) (30468897)	白梅学園大学・子ども学部・准教授 (32808)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関